

1730年以降のポウプの風刺対象の変化¹⁾

福 本 宰 之

▶キーワード

Pope、*The Dunciad*、
Imitations of Horace、
風刺対象

▼要 旨

Alexander Pope の風刺対象は1730年を境に変化している。それ以前の作品が主にへば作家を視野に置いた文壇風刺であるのに対し、1730年以降、詩人はより広く社会一般に見られる悪弊に筆誅を加えるようになる。このような変化を最も如実に表しているのが *The Dunciad* ではないだろうか。この作品に関しては、一応4巻構成という体裁をとっているものの、その風刺対象は最初の3巻（1729年出版）と第4巻（1742年出版）との間で大きく異なっている。1730年以前に書かれた前3巻が文壇風刺であるのに対し、第4巻の風刺対象は1730年代に出版された *Imitations of Horace* と総称される一連の作品群のそれに近くなっているのだ。さらに、風刺対象の変化は風刺技法の変化も引き起こした。*The Dunciad* 最初の3巻においては、モック・ヘロイックという技法がフルに生かされているのに対し、第4巻ではそのような技法は放棄されている。換言すれば、前3巻は作者と読者が共に属する文壇という世界を扱っているため、読者に新たな情報を提供する余地はなく、作者は既知の情報を斬新な手法で伝えることに活路を見出しているのに対し、第4巻では、一般の人間を読者として想定しているため、表現面で奇を衒うことなく、ストレートに主張を伝えようとしているのである。そこに、晩年「楽しませるためでなく、何か役に立つため、何か善を為すという目論みを持って書くべき時だ」と心中を吐露した風刺詩人としての作者の成長を読みとることができる。

I

まず、最初に1728年以降に出版された Alexander Pope の作品名を確認しておく、以下のようになる。

1728 *Peri Bathous, or Of the Art of Sinking in Poetry; The Dunciad* (3 Books)

1729 *The Dunciad Variorum* (3 Books)

1730

1733 *The First Satire of the Second Book of Horace; The Fourth Satire of Dr. John Donne*

1734 *The Second Satire of the Second Book of Horace; Sober Advice from Horace*

1735 *The Second Satire of Dr. John Donne; Epistle to Dr Arbuthnot*

1737 *The First Ode of the Fourth of Horace; The Second Epistle of the Second Book of Horace; Th First Epistle of the Second Book of Horace*

1738 *The Sixth Satire of the Second Book of Horace; The Seventh Epistle of the First Book of Horace; Epilogue to the Satires Dialogue I; Epilogue to the Satires Dialogue II; The Sixth Epistle of the First Book of Horace; The First Epistle of the First Book of Horace*

1740 *One Thousand Seven Hundred And Forty* (unfinished)

1742 *The New Dunciad* (Book IV)

1743 *The Dunciad* (4 Books)

この年譜は、当該期間中に出版されたポウプの作品を全て網羅しているわけではなく、現在ポウプの標準的な全集であるトゥイックナム版の第4巻で *Imitations of Horace* として一括されている作品群（1733年から1740年にかけて出版された16編）を中心に扱っている。なお1740年出版として載せてある *One Thousand Seven Hundred And Forty* は未完であり、作者の生前は出版されなかった。但し、その題が示すように1740年に書かれたものであり、今回は便宜上1740年の項に載せておいた。また *The Dunciad* の出版経過について略述しておく、まず1728年に初版が出版され、翌年にはポウプ自身が批評家たちの銜学を嘲った冗長な注釈を本文に加えた *The Dunciad Variorum* が3巻本で出る。さらに1742年には続編の *The New Dunciad* が出版され、これが後に第4巻となり既刊の3巻に加えられ、1743年に4巻構成の *The Dunciad* が出版される。本稿ではまずこの作品を手がかりに、1729年に出た *The Dunciad Variorum* と1742年に出た *The New Dunciad* の風刺主題の変化について考えて見ることにする。

II

以下に引用したのは *The Dunciad Variorum* の冒頭箇所である。ここで筆者は、ギリシア、ローマの叙事詩の伝統をまねて、作品の主題を読者に宣言している。

Books and the Man I sing, the first who brings

The Smithfield Muses to the Ear of Kings.

(*The Dunciad Variorum*, I, 1-2)²⁾

2行目に出てくる“Smithfield”とは、当時その猥雑さが際だっていたバルトロメオの市が立った場所であった。要するにこの2行でポウプは、「書物と、スミスフィールドに相応しい下賤な文学趣味を宮廷に最初に持ち込んだ男について私は歌うのだ」と宣言しているのである。冒頭の2行を読んだだけで、この詩の主題があくまで文壇風刺であることが了解出来る。*The Dunciad Variorum* では、ポウプが編集した William Shakespeare 全集にけちを付けた Lewis Theobald という男が「愚鈍の王」の称号を与えられ王位に就くという話を中心に、様々な文人や出版屋が、時には実名でからかわれている。一方、この *The Dunciad Variorum* と後に合体することになる *The New Dunciad* の主題は前3巻とは異なっている。この点を確認するために、ポウプ自身が *The New Dunciad* の冒頭に付した注釈を見ておく必要がある。

The DUNCIAD, Book IV.] This Book may properly be distinguished from the former, by the Name of the GREATER DUNCIAD, not so indeed in Size, but in Subject; and so far contrary to the distinction anciently made of the *Greater and Lesser Iliad*. (下線は筆者による)

この引用を読めば、第4巻がどういう意図で書かれたかは明白であろう。下線部で述べられているように、「大きさ」よりも「主題」において、この第4巻は前3巻とは区別されるべきもののなのである。何よりこの第4巻に元々付されていた“New”という形容詞こそが、この巻が1729年に出版された前3巻の単なる続編ではないことを示している。

それでは、具体的にどう主題が新しくなったのであろうか。簡単に言うと、既に見たように、*The Dunciad Variorum* が文壇風刺を意図したものであるのに対し、*The New Dunciad* は社会風刺を目論んだものということになろう。後者で槍玉に挙げられているのは、宮廷や宰相 Robert Walpole、イタリア・オペラやフランス料理といった外国趣味、パブリック・スクールや大学での旧態依然たる教育カリキュラム、そして物見遊山と化したグランド・ツアーなどである。もちろん *The New Dunciad* に文壇風刺が全く存在しないわけではないし、逆に *The Dunciad Variorum* にも宮廷に対する風刺は見られる。次に引用するのはその例である。

Say from what cause, in vain decry'd and curst,

Still Dunce the second reigns like Dunce the first?

(*The Dunciad Variorum*, I, 5-6)

引用にある“Dunce the second”、“Dunce the first”というのは、それぞれ George 2 世、George 1 世を指す。³⁾ ジョージ2世は、1728年に出た最初の *The Dunciad* を献上された時、既にこの2行が含まれていたにもかかわらず、作者ポウプを“a very honest man”と評したと言われている。また、翌年出た *The Dunciad Variorum* も宰相ウォルポールの手で国王夫妻

に献上されている。1728年の *The Dunciad* にポープ自らが注を付け、風刺の対象をより明確にしたこと自体、国王の要望によるものであった。⁴⁾ このように、1728、29年の *The Dunciad* に対し、国王や宰相が冷静な反応を示していたという事実は、この頃の *The Dunciad* があくまで文壇風刺としてとらえられていた証左となろう。この作品は宰相や国王にとって、あくまで他人同士の喧嘩と写っていたのである。

III

さて前章では、1729年の *The Dunciad Variorum* と1742年の *The New Dunciad* の2つの作品に見られる風刺対象の違いを確認したが、それでは、両者の間に出版された作品、冒頭の年譜で言うところの33年から40年の間に世に出た *Imitations of Horace* として一括されている作品群で扱われている対象は如何なるものであろうか。結論を先に言うと、それらは *The New Dunciad* のそれにより近い。これら16篇の作品において槍玉に挙げられている回数が圧倒的に多いのが、ジョージ2世、John Hervey、Mary Wortley Montaguの3人。2人目のハーヴェーとは国王の侍従を務めた人物で、Caroline 王妃やウォルポールから厚い信頼を得ていた。この3人に続くのが、そのキャロライン王妃とウォルポール、Frederick王子、Francis Chartres、George Bubb Dodington、William Pulteney、Peter Walter であるが、この7人の中にも文壇関係者は含まれていない。ドデントン、パルテニーは政治家であるし、チャータズとウォルターにしても、政治にも手を染めていたようであるが、前者は、召使いの女性を強姦した罪で訴えられており、むしろごろつきとして当時有名であった。一方、後者は高利貸しを営んでおり、Henry Fielding も *A Journey from This World to the Next* を初め、作品の中で執拗にこのウォルターを揶揄している。結局、*Imitations of Horace* と呼ばれている作品群の中で槍玉に挙げられている人物の中で、かろうじて文士のカテゴリーに入るのは、モンタギュー夫人くらいであろう。換言すれば、この作品群の風刺対象は宮廷、政治、そして世にはびこる悪弊、悪行などであり、*The Dunciad Variorum* に特徴的に見られた文壇風刺とは一線を画しているのである。

文壇風刺から社会風刺へ——こうした対象の変化を端的に写していると思われる詩人自身の言葉が、1738年に出版された *Epilogue to the Satires Dialogue II* に見られる。

Ask you what Provocation I have had?
The strong Antipathy of Good to Bad.
When Truth or Virtue an Affront endures,
Th' Affront is mine, my Friend, and should be yours.
(197-200)

既に述べたように、*The Dunciad Variorum* の主人公シオボルドはポープの編んだシェイクスピア全集に難癖を付けたために「愚鈍の王」の地位を与えられた。つまり *The Dunciad Variorum* はポープ個人に加えられた侮辱 (affront) に端を発するものであった。それに対し、*Imitations of Horace* ではもっと一般的な悪、上の引用の言葉を借りれば “Good” (善) や

“Truth”（真実）、“Virtue”（美德）に加えられた affront、一般の人々全てが共有すべき affront を扱っているのである。

これまでの議論から、とりあえず二つのことが結論として言える。まず、文壇風刺から社会風刺へというポウプの方向転換が *Imitations of Horace* という作品群が出る前、おおよそ1730年頃に為された、ということである。（因みに年譜の最初に *The Art of Sinking in Poetry* という作品が挙げられているが、これも文壇風刺である。）次に、我々が4巻構成として知っている *The Dunciad* という作品は、最初の3巻と第4巻との間に大きな主題のずれが見られ、かつそのずれの因って来る所以は、単に出版時期が13年隔たっているからではなく、1730年という分水嶺を間に挟んで両者が書かれたから、なのである。つまり *The Dunciad* 第4巻とは、形式上は前3巻の続編ということになっているが、実質的には1730年という分水嶺以降に書かれた *Imitations of Horace* により近い関係を持った作品なのである。

IV

それでは、このようなポウプ風刺対象における方向転換は、*The Dunciad* の最初の3巻の描写方法と第4巻のそれとの間に、どのような違いをもたらしたのであろうか。換言すれば、これまで述べてきた風刺対象の変化は、風刺技法にどのような変化をもたらしたのであろうか。この点を考察するには、まず *The Dunciad* の粗筋をおさらいしておく必要がある。まず、第1巻では主人公の三文文士（1729年版では、既に述べたようにシオボルド、43年版では Colley Cibber）が、本棚から取り出した駄作をピラミッド状に積み上げ、火を放つ。すると愚鈍の女神が現れ、火を消し止めて、三文文士を自らの館に連れて帰り、彼が愚鈍の王として即位した旨、宣言する。一見、荒唐無稽な話に思えるが、Aubrey Williams は、実はこの第1巻のストーリーが Virgil の *The Aeneid* を下敷きにして構成されている事実を指摘している。⁵⁾ 例えば先に引用した *The Dunciad Variorum* の冒頭二行が既に *The Aeneid* の出だし（“ARMS I sing and the man who first from the coasts of Troy, exiled by fate, came to Italy and Lavinian shores;”）⁶⁾ のパロディーとなっているし、また著作の山に火を放つくだりも、*The Aeneid* の中で炎がトロイの城塞を焼き尽くす場面を元になっている、とウィリアムズは主張する。

さらに、*The Dunciad* 第2巻や第3巻になると、古典のパロディーであることはますます明白となる。第2巻では愚鈍の女神の呼びかけに応じて、全国から様々な愚物が彼女の元に馳せ参じ、パトロンのくすぐり競争、大声競争、フリート下水溝を舞台にした飛び込み競争といった様々なゲームに参加する。こうした滑稽な競技に文士や出版屋たちを参加させることで、ポウプは彼らを笑い物にしているのだが、こうした設定が *The Iliad* 第23巻や *The Aeneid* 第5巻で英雄たちが繰り広げる競技会を念頭に置いているのは言うまでもない。また第3巻では、眠り込んだ愚鈍の王が予言者に導かれて、エーリュシオンつまり極楽浄土の世界へと赴く。そこで John Dryden のライバルだった劇作家 Elkanah Settle から、愚鈍の帝国の過去、現在、未来の姿を見せられ、さらに自分こそ古代に予言された愚鈍の王であり、新たな支配者としてこの世に遣わされた者であると保証される。これは明らかに Aeneas が冥界下りを行い、亡父 Anchises に再会し、その口から将来自分が築くことになるローマの栄光について語り聞かされる *The Aeneid* 第6巻のパロディーになっている。このように *The Dunciad* 最初の3巻は

mock-heroic の言葉通り、古代ギリシア・ローマの英雄たちが活躍する叙事詩を下敷きにして構成されているのである。

一方、分水嶺の後に書かれた第4巻は如何なる粗筋を持っているのかと言うと、これが極めて単純である。愚鈍の女神と愚鈍の王が玉座に就いている眼前に、パブリック・スクールや大学の教育者、グランド・ツアー帰りの墮落した若者と付き添いの家庭教師、さらに老いさらばえた魔法使いなどが次々と現れて、自らの愚かぶりを女神と王に披露するだけである。つまり、構造上は、前3巻とは異なり、ギリシア・ローマの叙事詩の模倣とはなっていない。*The Dunciad* 最初の3巻と第4巻との間に見られるこうした構造上の違いは、一体どのような戦略から生まれてきたものなのであろうか。既に見たように、最初の3巻ではギリシア・ローマの古典作品への言及や、模倣、パロディーなどで読者を楽しませようという意図が明白なのに対し、第4巻ではそうした努力は放棄され、むしろ登場人物たちの独白や行動を通して、彼らが体现する社会的な悪弊や悪習をストレートに暴き出そうとしている。読者の側からすれば、最初の3巻を読んでいる間は詩人の技巧面ばかりに注意が行き、そこで風刺されている対象や作者の主張といったものは、余り真摯に伝わって来ない。(ついでながら、ポウプの作品の中で、このように筋よりも表現方法や技巧面に読み手の注意を向けさせようという意図が最も濃いの、*The Rape of the Lock*、その中でも特に有名な第3歌のトランプ・ゲームの場面であろう。) 例えばある講演者が「首相は辞任すべきだ」という主張をする際、地声で「首相は辞任すべきだ」と叫べば、聞き手も素直にその主張を受け取るであろうが、もし、同じ主張を誰か有名人の声色を真似て叫べば、どうであろうか。聞き手の注意は、主張そのものの内容や正当性よりも、むしろその話しぶりや声音が元の有名人にどれだけ似ているか——つまり物真似がどれだけ上手か——という点に向けられるであろう。さらには、件の主張は物真似の腕前を示すために便宜的になされただけで、講演者の本心ではない、と受け取られる可能性すらある。ポウプに関して言うと、*The Dunciad* 最初の3巻においてはヴァージルや Homer といった有名人の物真似をしながら語り、第4巻において初めて地声に戻ったのである。先に「最初の3巻を読んでいる間、読者の注意は詩人の技巧面にのみ向かいがちで、第4巻に比べ、ポウプのメッセージが真摯に伝わって来ない」と述べたのは、そういう理由からである。

V

それでは、1730年を挟んで文壇風刺から社会風刺へと主題の方向転換が図られたことと、同じく1730年を挟んで書かれた *The Dunciad* 最初の3巻と第4巻との間で表現方法の上でも違いが見られるということ——この2つの事実はどう関連しているのかを最後に考えてみたい。

O thou! whatever Title please thine ear,
Dean, Drapier, Bickerstaff, or Gulliver!
Whether thou chuse Cervantes' serious air,
Or laugh and shake in Rab'lais' easy Chair,
Or praise the Court, or magnify Mankind,
Or thy griev'd Country's copper chains unbind;
(*The Dunciad Variorum*, I, 17-22)

17. *Whatever Title* <A god is frequently invoked in classical epic by different names.>

17-24. <“It was my principal aim in the entire work to perpetuate the friendship between us, and to show that the friends or the enemies of the one were the friends or enemies of the other.” — Pope to Swift, Oct. 9, 1729. — The invocation to Swift was considerably revised before it appeared in print. For an earlier version, see EC vii 104. Some Latin verses written by Charles Ford in 1727 for Swift’s birthday seem to anticipate the *Dunciad* invocation. See *Letters of Swift to Ford*, ed. D. Nichol Smith, 1935, pp.213-5.>

18. *Bickerstaff* <Isaac Bickerstaff, a pseudonym used by Swift in some of his lighter satires, e.g. those on Partridge the Astrologer. The name was later adopted by Steele for his *Tatler*.>

20. *Rab’lais’ easy Chair* <“Dr. Swift was a great reader and admirer of Rabelais, and used sometimes to scold me for not liking him enough” (Pope). — Spence, p.141.>

21. *Or praise the Court, & c.] Ironice*, alluding to *Gulliver’s* Representations of both — The next line relates to the Papers of the *Drapier* against the currency of Wood’s Copper Coin in Ireland, which upon the great discontent of the people, his Majesty was graciously pleased to recal <1729b>.

これは *The Dunciad Variorum* の冒頭近くで、ポウプが親友の Jonathan Swift に呼び掛けている箇所と、その箇所に付けられたトゥイックナム版の注釈である。後者に関して附言しておく、< > で囲まれた部分はトゥイックナム版の編者が加えた補足説明であり、元々の1729年版には付けられていなかった。つまり21行目に *Gulliver’s Travels* と *The Drapier’s Letters* の内容に言及した注釈が加えられている以外、当時の読者は Dean、Drapier、Bickerstaff、Gulliver などが一体如何なる人物で、何故ここに登場しているのか一切説明されなかったのである。ここから作者ポウプは、ある程度当時の文壇に関する知識を持った人間のみを読者として想定していたと推察できる。既に述べたように、*The Dunciad Variorum* で槍玉に挙げられているシオボルドは、そもそもポウプの個人的な恨みを買ったために愚鈍の王の位を与えられたのであり、ウォルポールのように広く社会から認知された悪役ではなかった。従って、このような人物を主人公にした風刺作品を、文壇に縁もゆかりもない一般の人間が興味を持って読んだとは考えにくい。言い換えれば、*The Dunciad Variorum* は「文士の、文士による、文士のための」風刺詩なのであり、閉じられた世界なのである。このようにお互いがお互いに対し、ある程度の知識を持った世界で風刺作品を書くとなれば、「～はこういう作家だ」とか「～こういう駄作を書いている」というようなことを書いてもうけるはずはなく、むしろ皆が周知の有名な文士の駄作や言動を、斬新な方法を使って誇張し再現する方向に作者が活路を見出すのは、当然であろう。ポウプが *The Dunciad* の最初の3巻において、ヴァージルやホーマーの擬態を演じながら語っている——読者の注意を筋よりも技巧面に向けさせようとしている——のは、風刺対象が書き手と読み手が共に属する勝手知りたる身近な世界、つまり文壇であることと無関係ではないのである。

一方第4巻になると、学校教育の不備、墮落したグランド・ツアー、ウォルポールの悪政といった社会的な事象が風刺の対象となる。これらの事象はポウプの属する文壇という世界に限られたものではなく、その意味で前3巻とは対照的に外に向かって開かれた風刺となる。このように一般の人間を読者として想定し、彼らの利害や生活に直接関わる、より深刻な話題を扱う場合、逆に今度は奇を衒ったような表現方法は敬遠され、よりストレートに主張が伝わる手法を作者は採るようになる。1730年よりはずっと後になるが、*The Dunciad* 第4巻が出る前年の1741年にポウプは Marchmont 伯に宛てた手紙の中で次のように述べている。

I think fifty an age at which to write no longer for Amusement, but for some Use, and with design to do some good. I never had any uneasy Desire of Fame, or keen Resentment of Injuries, & now both are asleep together: Other Ambition I never had, than to be tolerably thought of by those I esteem'd, and this has been gratify'd beyond my proudest Hopes. I hate no human Creature, & the moment any can repent or reform, I love them sincerely.

(To the Earl of Marchmont, 10 Oct. 1741)

引用部分の冒頭でポウプは「50歳という年齢を、もはや楽しませるためでなく、何か役に立つため、何か善を為すという目論みを持って書くべき時だと考えております」と、当時の心境を吐露している。内容面では文壇風刺という狭い殻を破って、より一般的な社会風刺へと移行し、またそれを表現する形式面では叙事詩のパロディーという趣向を放棄した詩人としての成長を、この手紙の文面がよく表しているのではないであろうか。

注

- 1) 本稿は平成10年11月に行われた第26回大阪市立大学英文学会年次大会における口頭発表『1730年代以降に見られるポウプの風刺対象の変化について』に、加筆修正を施したものである。
- 2) ポウプの詩の引用は全て、John Butt, gen. ed., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. 11 vols. (London and New Haven: Methuen and Yale UP, 1939-69) (以下TEと略す) による。
- 3) 当該箇所付された編者 James Sutherland の注釈を参照。(TE, vol.5, p.61.)
- 4) この辺りの事情については1728年6月17日付けの Oxford 伯に宛てたポウプの書簡、およびそれに付された George Sherburn の注釈参照。(George Sherburn, ed., *The Correspondence of Alexander Pope*, 5 vols. [Oxford: Clarendon Press, 1956] vol.2, p.502.) 以下、ポウプの書簡からの引用はこの版による。
- 5) このあたりの議論については、Aubrey L. Williams, *Pope's Dunciad: A Study of its Meaning* (London: Methuen, 1955) を参照。
- 6) 英訳については H. R. Fairclough, trans., *Virgil: Eclogues, Georgics, and Aeneid I-VI* (Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard UP and William Heinemann, 1986) による